

伊勢湾アサリ漁業環境基盤整備事業

奥村康太・勝田孝司・羽生和弘

目的

「伊勢湾アサリ復活プロジェクト」で伊勢湾内のアサリ資源増大に向けた造成干潟、効率的な稚貝移植手法の確立に取り組んでいる。アサリに悪影響を及ぼすカイヤドリウミグモ（以下、「ウミグモ」という。）が、干潟造成に用いる砂の採取場所の松阪地区で確認されたことから、造成先の楠地区のウミグモ生息状況を調査するとともに、分布状況の境界を把握のための調査を行う。また、移植用アサリ稚貝を採取する香良洲、今一色地区の稚貝発生状況を調査するとともに、ウミグモの生息状況を把握する。

方法

1 楠地区の造成干潟におけるウミグモ生息状況調査

造成干潟において二枚貝類を採取し、殻長等の計測後に実体顕微鏡によりウミグモの寄生状況を調査した。5月7日、25日にジョレンにより二枚貝採取を実施した。7日はバカガイ4個を採取したが、7日は二枚貝類を採取することができなかった。

2 ウミグモの分布調査（稚貝発生状況調査時を除く）

鈴鹿～松阪地先で採取されたアサリについて、上限30個体で実体顕微鏡によりウミグモの寄生状況を調査した。鈴鹿地先で6、7、10月に各1回、津市地先で8月に1回、松阪地先で11月に2回実施した。

3 香良洲、今一色地区のアサリ稚貝発生状況およびウミグモの生息状況調査

調査測点数は香良洲地区27測点、今一色地区39測点とした。調査は船上から軽量簡易グラブ採泥器（採泥面積：約0.05m²）を使い、1測点につき2回底泥を採取した。採泥器で採取した底泥を船上で2mmのフルイにかけて目合いに残ったものを持ち帰り、目視で選別した。アサリ稚貝は殻長によって3つに階級分けし、5mm未満をアサリ小、5mm以上15mm未満をアサリ中、15mm以上をアサリ大とした。アサリ稚貝は、階級別に最大100個体の殻長および重量を測定した。残りは、合計重量/全個体数を測定し、階級別の重量に換算した。

香良洲地区（雲出川河口域の新川、古川（7共内））では、アサリ稚貝の稚貝発生状況調査を3回行った。第1回を6月5日、第2回を10月7日、第3回を2月20日に

行った。例年5～6月での調査結果を基に平均殻長および推定資源量を三重県あさり協議会で報告している。平均殻長および推定資源量は以下の方法で求めた。平均殻長は、各測点の階級別の平均殻長と個体数の加重平均で求めた。推定資源量について、アサリ稚貝が50個体/0.1m²以上いた測点の合計重量をその測点数で割り、0.1m²当たりの重量を求め、10倍して1m²当たりの重量とした。漁場面積は、Google Earthを使用して、50個体/0.1m²以上いた測点を囲んだものとした。これより、1m²当たりの重量に漁場面積をかけ推定資源量を算出した。

今一色地区（宮川河口域および五十鈴川（9、10、11共内））では、稚貝発生状況調査を3回行った。第1回を7月21日と8月24日、第2回を2月1日に行った。第1回は、7月21日に全測点を調査できなかったため2日行った。今一色地区では、1m²当たりのアサリ稚貝個体数を求めた。

香良洲、今一色地区の2回目以降の調査は、アサリ稚貝が50個体/0.1m²以上で確認された測点で行った。

結果および考察

1 楠地区の造成干潟におけるウミグモ生息状況調査

造成干潟で5月7日に採取したバカガイを検鏡した結果、ウミグモは確認できなかった。2年間の調査ではウミグモを確認されていないが、調査個体数が少ないこともあり、引き続き調査を実施する。また、干潟の利活用の変更にもない調査サンプルが入手可能となった場合、それらを用いることも検討する。

2 ウミグモの分布調査（稚貝発生状況調査時を除く）

各調査で17～30個体を検鏡した結果、いずれもウミグモは確認できなかった。このため分布状況の境界を推定することは困難であった。

近年、アサリやシオフキ等のウミグモ寄生率の高い二枚貝類の生息量が急減したこともあり、ウミグモの生息量も急減した可能性がある。今後は、検鏡以外の手法での調査についても検討する。

3 香良洲、今一色地区のアサリ稚貝発生状況およびウミグモの生息状況調査

香良洲地区の6月5日の調査では、新川で平均殻長8.7mmの稚貝が確認され、稚貝の資源量は約67トンと推定

された。古川では、平均殻長 7.5mm の稚貝が確認され、稚貝の資源量は約 5 トンと推定された。本結果を 6 月 23 日に開催された三重県あさり協議会で報告したところ、カイヤドリウミグモの寄生を認識して、移植放流を行う結論となった。しかし各漁協より移植放流の申し出がされなかったため、見合わせとなった。2 回目以降の調査でアサリ稚貝密度の減少が確認され、3 回目の調査では 0 個体もしくは最大 40 個体/m²の密度でしか確認されなかった。

今一色地区の 7 月 21 日、8 月 24 日の調査では、大湊周辺でアサリ稚貝が最大 3,030 個体/m²の密度で確認された。2 月 1 日の調査では、アサリ稚貝が 1,990 個体/m²の密度で確認された。

過去の調査では、6 月～7 月に香良洲、今一色で確認されたアサリ稚貝はその年の秋から減少して冬にはほとんど残らないことが確認されている。本調査での香良洲地区で同様の結果となった。今一色地区の大湊周辺の 2 測

点では、8 月 24 日と 2 月 1 日で個体数密度に大きな変化がみられなかった。そのため、平均殻長を比較してみると大きな変化がみられなかったため、成長して残っているのではなく、新規の個体が加入したのではないかと考えられた。

アサリ稚貝移植放流は、今年度を含めて 3 年連続で行われていない。移植放流の再開に備えて、引き続きアサリ稚貝発生状況およびウミグモの生息状況調査を行っている。三重県あさり協議会の参加者である漁協関係者より、秋に移植放流を行い、翌年の春に漁獲できるようにしたいと要望があった。これを踏まえて、春（5～7 月）と秋（9～11 月）にアサリ稚貝の発生状況調査を実施していく。